

〔原著〕

新任期にある学士課程卒業者の看護実践経験をもとにした学び

橋本 麻由里

The Learning Status of Newly Employed Nursing Graduates Based on Their Clinical Nursing Experience

Mayuri Hashimoto

要旨

本研究の目的は、看護実践の経験において、大卒新任者がどのように考えて看護実践に取り組み、看護について何を得たのかという視点で、大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びを明らかにすることである。そして、看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職となるために、学士課程において何を学ぶとよいのかを考察する。

方法は、学士課程卒業後2～3年目の看護師6名を対象に、自分の成長や学びにつながったと思う看護実践経験について2回の半構成的面接を実施し、その内容から看護実践経験において取り組んだこと、看護について得たことを質的帰納的に分析した。

結果、6名の大卒新任者は、2回の面接を通して3～6つの看護実践経験を語った。その内容は、受け持ち患者へのかかわりや新たに担う役割に関する看護実践経験が多かった。6名の大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びは〔実践における確かさが持ちにくい中で自立を目指す〕〔対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する〕〔看護師としての責任や使命感を意識して取り組む〕〔他者と協働して実践を進めていく〕〔実践をもとに、今後の看護に向けて自分を進めていく〕〔自分の成長や実践力を向上する〕の取り組みにより、《対象者への深い理解》《患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割》《命を守る看護師の責任の重さ》《患者の問題解決に対する受け持ち看護師の責任》《チームで実践に取り組むこと》《確実に看護を実施するための準備方法》《自分の成長のための目標や機会・方法》《看護に対する“できる”という手応え》を得たことであった。

以上のことから、看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職となるために、学士課程では対象者の思いに焦点を合わせ、その人を人として理解し尊重する基礎的態度、看護専門職として自分を育てていく責任と方法、他者と一緒に考え問題解決していく意義や方法を学ぶことが重要であると考えられる。

キーワード：学士課程、新任期看護師、看護実践経験、学び

I. 緒言

看護師は臨床の看護実践経験をもとに、看護について学び成長する。よって、よりよい看護を目指して日々試行錯誤することそのものが、看護師としての重要な学びの機会である。看護実践経験をもとに学ぶことは「看護系大学におけるモデルコアカリキュラム導入に関する調査研究報告

書」(文部科学省, 2012)でも、専門職者として研鑽し続ける基本能力としてコアとなる能力とされ、看護職者には経験の中から学び、その経験から得た知識を蓄積していくことで看護専門職として研鑽し続けることが求められる。しかし、新任期にある学士課程卒業の看護師(以下、大卒新任者とする)の看護実践能力で、看護の質改善や専

門性の向上、継続学習などに関わる、実践の中で研鑽する能力は、就職後伸び悩み傾向が指摘されている(中山ら, 2010;三橋ら, 2010)。また、この能力は意識的な自己研鑽、高い専門職意識に裏付けられる能力で、日常の実践での育成が難しく自己評価では実感しにくい(中山ら, 2010)と指摘されることから、大卒新任者にとっては看護実践経験をもとにした学びの過程が見えにくく、意図的に学びを積み重ねることが難しいのではないかと考えられる。

大卒新任者の経験を捉えた先行研究では、就職後3か月から1年以内の早期の経験を捉えたものが多く、リアリティショックを乗り越え看護専門職として社会化する過程や支援のあり方(宮脇, 2005;荒川ら, 2007)、実践上の困難に対する看護実践の現状(西田, 2006)、経験により点滴静脈注射の看護技術が熟達する過程(豊島, 2009)などが報告されている。看護師としての職業社会化や看護技術習得などに対しては、2010年に努力義務化された新人看護職員研修において対策が講じられ、支援の充実が図られている。

一方、大卒新任者が看護実践において、どのように取り組み看護について学ぶのかを明らかにした研究や、リアリティショックまたは職業社会化などの初期の課題を超えた2年目以降の看護実践の経験をもとにした学びや成長についての報告は少ない。中野ら(2004)は、1～2年目看護師が看護実践能力を向上するために自ら行っている取り組みは、先輩へのかかわり、経験、学習であったと報告しているが、具体的な看護実践とのつながりは明らかにされていない。しかし、大卒新任者が、実践の中で研鑽し、看護実践経験をもとに学び成長するために、またその支援をするために、具体的な看護実践の過程に沿って、看護実践にどのように取り組み、看護について何を学んだのかを明らかにすることが必要であると考えられる。

そこで、本研究は、看護実践の経験において、大卒新任者がどのように考えて看護実践に取り組み、看護について何を学んだのかという視点で、大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びを明らかにすることを目的とする。そして、看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職となるために、学士課程において何を学ぶとよいのかについて考察する。

II. 用語の説明

本研究では、自分なりに考えて看護実践に取り組み、その看護実践の経験から看護の知識や態度を得ることを学びと捉える。よって、看護実践経験をもとにした学びとは、看護実践の経験において取り組んだこととその経験をもとに看護について得たことで構成されるとした。看護実践の経験において取り組んだこととは、看護を実践するために、自分なりに考えて実施した行為(うまくいかなかったことや、実践のための準備として行ったことも含む)、課題を自覚するなどの認知活動や思考活動とする。看護について得たこととは、その看護実践の経験から大卒新任者自身が看護について得たこととして認識し、その後の看護に影響を与えている看護の知識や態度とする。新任期とは、就職後1～4年目頃までをいうものとする。

III. 方法

1. 研究協力者

研究協力者(以下、協力者)は、学士課程卒業後、病院に勤務する卒後2～3年目看護師6名である。協力者は、A県内において大卒新任者の受け入れ実績があり、教育体制が整備され、7対1入院基本料を取得している施設を、ホームページや実習施設等により筆者が把握していた情報をもとに選択し、施設に協力を依頼した。研究への承諾を得た3施設の看護管理者に、卒業後より当該施設に継続勤務し、研修への参加等自発的に学習しながら看護実践に取り組んでいる人という条件で、協力者の推薦を得た。

2. データ収集方法

協力者に対し、自分の成長や学びにつながったと思う看護実践経験について、2回の半構成的面接調査を行った。新任期の経験の詳細を十分語ってもらうために時期を分けて実施し、2回目の面接は1回目面接の翌年に、主に1回目面接以降の看護実践経験について聞いた。1回目の面接は60分程度で、データ収集期間は平成23年9月～24年9月である。

面接内容は自分の成長や学びにつながった看護実践経験について、看護実践に対しどのような思いや考えで取り組んだのか、その看護実践を行うために努力したことや準備したこと、その経験から看護について得たことは何か、看護について得たことはその後の看護に影響があったか、であった。

3. 分析方法

- 1) 協力者ごとに逐語録を作成し、語られた内容から1つ1つの看護実践経験のまとまりを捉えて区分した。
- 2) 内容を熟読し、1つの看護実践経験ごとに、その看護実践経験において、どのように考えて看護実践に取り組み、その実践から看護について何を得たのかを以下のように質的帰納的に分析した。
 - (1) 看護実践経験において取り組んだことに該当する内容を抽出し、取り組んだ時の思いや考えがわかるように要約した。何に取り組んだのかという視点で要約を読み、意味内容の類似性により分類・整理し、看護実践経験において取り組んだことの小項目とした。
 - (2) 看護実践経験において看護について得たことに該当する内容を、協力者がその看護実践経験から得たこととして語った内容を手掛かりに、取り組んだこととのつながりを確認して抽出し、得たこととして要約した。
- 3) 協力者全員のすべての看護実践経験において取り組んだことと看護について得たことを、以下のように質的帰納的に分析した。
 - (1) 協力者全員の看護実践経験において取り組んだことの小項目を、意味内容の類似性により分類・整理し、中項目及び大項目を抽出した。その際、まず協力者ごとに2回の面接で語った全ての看護実践経験から得た小項目について、同一の内容であると判断できるもののみ統合し、一つの小項目として表現を修正することで、小項目は協力者固有の取り組みとした。分析例の一部

を表1及び表2に示す。

- (2) 協力者全員の看護実践経験から得られた、看護について得たことの要約を統合し、意味内容の類似性により分類・整理した。
- 4) データ分析は、協力者による面接データの逐語録の確認を得て実施した。分析過程において判断に迷う場合は、看護実践経験の文脈に戻って内容を確認し最終的な分析結果とした。また、分析過程を通して、質的研究に精通した複数の指導者の助言を受け分析を進めた。

4. 倫理的配慮

本研究は岐阜県立看護大学大学院研究倫理審査部会の承認を得た（通知番号23-A012-2、2011年6月承認）。研究協力は本人の自由意思であり、研究協力を断っても職務評価には関係なく不利益を被らないこと、同意後も研究協力を中止できることを説明した。またデータは匿名化すること、データ管理及び破棄、研究の公表予定を口頭と文書で説明し、書面による同意を得た。面接調査では、ICレコーダーへの録音について説明し、許可を得て実施した。

IV. 結果

1. 協力者の概要

協力者の面接時の経験年数及び面接所要時間を表3に示す。協力者は、女性5名、男性1名の6名で、2名は出身大学が同一であった。所属施設は300～600床の公立病院2施設、特定機能病院1施設で、5名は一般病棟、1名は救急関連部門の所属であった。6名とも受け持ち看護師

表1 化学療法の計画を医師に相談し、患者の思いを優先してかかわった経験（fさん 3年目）分析例

看護実践経験において取り組んだことに該当する内容	取り組んだことの要約	小項目
患者にとって、母親の法事に行けるか行けないかがすごく違うんじゃないかと思った。何を優先させるかということでは、医療者としては治療優先という人もあるかもしれないが、治療よりも法事の方が大事だと思った	何を優先させるかは、患者にとって大事なことを優先させることが大事だと考える	患者にとって大事なことを優先することを自分の責任として実行する
その人の立場で優先順位を考えて、無事に外泊してもらえてよかった。自分でもがんばったと思った	患者の思いを優先したケアを、受け持ち看護師として、自分が責任をもつことを意識し実行する	
今までの経験で（化学療法の）点滴を早めても大丈夫と知っていたので、治療もできて法事にも行ける案をいくつか医師に言ってみた	これまでの経験を活かした見通しをもち、患者の思いと治療を両立できる案を相談する	経験からケアの実行可能性を見通し、対策を考案する
今までの前例なども確認し、立案した対策を先輩に相談してみた		
医師もわかってくれて、指導医に相談して、点滴スピードを調整してよいと指示を得たので、状態を見ながら点滴を早めた	医師の理解を得て、安全を確認しながら変更した治療を管理する	治療への患者の思いをもとに、医師に働きかけ理解を得る
（治療もできて法事にも行ける案を）主担当の先生に言ってみて、上の先生に相談してもらおうよう、作戦を立てすすめた	作戦を立て、治療計画の調整を医師に交渉し、一緒に考える	
だめもとで化学療法のスケジュールの変更案を提案し、医師と一緒に考えた		
看護師は医師の補助ではなく、一番患者を見ていて、患者の言えないところを医師に伝えることや異常の早期発見などが大事だと3年間で学んだ	自分の実践から、一番患者を看ている看護師の役割は何かを見出す	自分の実践から、一番患者を看ている看護師の役割は何かを見出す

表2 看護実践経験において取り組んだこと
 [対象の思いに焦点を合わせたかわりを模索する]の中項目 分析例

中項目	小項目	取り組んだことの要約	看護実践経験において取り組んだことに該当する内容
患者の思いを汲み取り、師に対応を相談する治療・ケアに反映する		苦痛を我慢している患者への対応を、医師に相談したが、うまくいかない	薬に頼らず、吐き気を我慢している患者を見て、薬の使用を医師に相談したが、実現しなかった
		治療後の患者の気持ちや希望を汲み取り、医師と相談して対応する	治療後、「とにかく叫びたいから、カラオケに行きたい」という患者の希望を受けて、医師と相談し外泊してもらった
	医師に言えない患者の思いに気づき、間に入る	患者は、医師の説明に納得できておらず、医師と患者の思いがちよっと違うことに気づく	患者は、治療に対して医師の説明は受けているが、納得ができておらず信頼していないわけではないが、医師の方針と（患者の）思いがちよっと違っていた
		医師に直接言えない患者の思いに、うまく助言できたらと思いかかわる	医師に直接言えない患者の思いに、うまく助言できたらと思いかかわった
治療への患者の思いをもとに、医師に働きかけ理解を得る		作戦を立て、治療計画の調整を医師に交渉し、一緒に考える	(治療もできて法事にも行ける案を) 主担当の先生に言ってみて上の先生に相談してもらうよう、作戦を立てずめた。だめもとで、化学療法スケジュールの変更案を提案し、医師と一緒に考えた
		医師の理解を得て、安全を確認しながら、変更した治療を管理する	医師もわかってきて、指導医に相談し点滴スピードを調整してよいと指示を得たので、状態を見ながら点滴を早めた
患者と医師の思いのずれを受け止め、信頼関係が保てるように気を付けてかかわる		患者のイライラや思いのズレを受け止め、患者が納得できるように説明を心がける	気をつけているのに高血糖の治療が必要となってしまったため、患者の思いと医師の思いにずれがあった。患者のイライラを受け止め、納得のいくように説明するようになった
		患者と医師との関係がつかっているように気を付けてかかわる	患者と医師との信頼関係が繋がっているように気を付けてかかわった

* 表の右端の英小文字は協力者、丸数字は何年目の経験かを示す

表3 面接時の経験年数と面接時間

協力者	1回目面接時の経験年数	面接時間	2回目面接時の経験年数	面接時間
a	1年9カ月	62分	2年5カ月	63分
b	1年7カ月	72分	2年5カ月	83分
c	1年9カ月	57分	2年5カ月	55分
d	1年9カ月	43分	2年6カ月	62分
e	2年6カ月	67分	3年5カ月	69分
f	2年6カ月	65分	3年5カ月	59分

またプライマリナースとして、継続して患者を担当し看護を提供する体制であった。3施設とも1年目はプリセプターシップによる教育体制をとっていた。

2. 看護実践経験において取り組んだこと

6名の大卒新任者は、2回の面接を通して3～6つの経験について語り、それらは主に受け持ち患者へのかかわりや新人教育などの新たな役割に関する実践経験であった。これらの看護実践経験において取り組んだことは133の小項目が抽出され、24の中項目と6つの大項目に分類された(表4)。以下に、大項目ごとに内容を説明する。文中の【 】は中項目、< >は小項目で、小項目内の①～④の数字は何年目の経験かを示す。

1) 実践における確かさが持ちにくい中で自立を目指す

これは、わからないことや見通しが持てない状況に対し、

周囲の支援を得たり自分なりに試行錯誤しながら、看護師としての自立を目指す取り組みで8つの中項目が含まれた。

【困難な状況に直面し、思うようにできない自分を自覚する】は<病状の重い子どもの家族にどうしたら寄り添えるのか自問する①><重症者への看護の難しさや限界感を自覚する②><やく抑制解除の判断基準を見極められない現状を自覚する③>などケアの難しさや判断の難しさを自覚する取り組みであった。また、患者を前に<大学での学びが、思うように活かせない自分を自覚する①><患者の思いの核心に迫れない自分の弱さに気付く③>などうまくいかない自己の課題を自覚する取り組みであった。

【周囲の人々や先輩の支援を得てわからないことや新たな実践に取り組む】は<わからない事や悩みを先輩やチームに相談する①><相談できる先輩との関係を保つ①②><周囲の人々を信頼し重症者のケアに取り組む③>など先輩やチームの支援を得たり、周囲の人々と良い関係を保つ取り組みであった。また<先輩の実践やカンファレンスでの相談など、意図して他者の力を借りる③>や、新たな役割に対し<先輩の実践を見聞きし、周囲と相談しリーダーの仕事を実践する③>取り組みであった。【想定しがたい

表4 看護実践経験において取り組んだこと

大項目	中項目	小項目の一部抜粋	
実践における確かさが持たれにくい中で自立を目指す	困難な状況に直面し、思うようにできない自分を自覚する	病状の重い子どもの家族にどうしたら寄り添えるのか自問する(e①)、重症者への看護の難しさや限界感を自覚する(a②)、抑制解除の判断基準を見極められない現状を自覚する(c③)、大学での学びが、思うように活かせない自分を自覚する(b①)、患者の思いの核心に迫れない自分の弱さに気付く(f③)、ターミナル期の患者・家族との率直なコミュニケーションの難しさを自覚する(e④)、患者に向き合おうと思うが、うまくいかず自分の気持ちを立て直せない(d②~③)	
	周囲の人々や先輩の支援を得てわからないことや新たな実践に取り組む	わからない事や悩みを先輩やチームに相談する(b①)、相談できる先輩との関係を保つ(a①、b②)、周囲の人々を信頼し重症者のケアに取り組む(a③)、先輩の実践や、カンファレンスでの相談など、意図して他者の力を借りる(f③)、先輩の実践を見聞し、周囲と相談しリーダーの仕事を実践する(c③)	
	想定しがたい患者の実際を理解する	書いてある通りにいかないのが、実際を見る(f②)、呼吸状態に優先して取り組み、体の中で何が起きているかを理解する(a②)、自分の想像とは違って、頑張っている患者に気づく(f④)	
	試行錯誤しながら、自分なりに考えて実践に取り組む	初めて受け持ち看護師となり、わからない中で術前の看護に取り組む(b①)、先の見通しがわからず、うまくは応えられなかったが、できることを考え対応する(c②)、自分なりの判断基準を決めて試行し、相談しながらケアの判断を固めていく(c③)、不安な中で、自分自身でできる学生指導の方法を考えてかかわる(b③)、看護として、自分なりにできることを考え、ケアの方法を試行錯誤する(a②)、プレッシャーの中で、新たにリーダーの仕事に取り組む(c③)	
	先の予測や見通しを持つよう意識し行動する	先を見据えることの大切さに気づき、見通しを意識して行動する(b①)、もっと早く異常に気付くように、文献を調べる(c②)、優先順位を考えて仕事の計画をやりくりする(c②)	
	根拠のある実践をするために、調べて不明な点を解決する	身近な資源を活用し、わからないことはできるだけ早く解決する(a①②)、調べて、間違いないように患者に対応する(c②)、自己学習により、根拠を理解しケアに役立てる(d①)、文献で調べた根拠をもとにして、説明やケアを実践する(e①、e④)、ケアに必要な情報や知識を集める(f④)	
	実践を振り返り、自分なりの視点で評価する	常に、実践の振り返りをする(e①)、自分でできることと相談すべきことの見極めが難しく悩む(b②)、自分でできることと相談すべきことを見極め行動する(b③)、事後評価が得にくいいため、自分なりの視点で評価する(b③)	
	ケアにあたる自分の気持ちを整える	気持ちを切り替えて、仕事の大変さを乗り越える(a①)、苛立つ気持ちをコントロールし、患者を受け止める(f④)	
	対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する	患者の思いを汲みとり、治療・ケアに反映する	患者の思いを汲み取り医師に対応を相談する(d①)、医師に言えない患者の思いに気づき、間に入る(c②)、治療への患者の思いをもとに、医師に働きかけ理解を得る(f③)
		家族の思いに添って看取りのケアを実施する	家族の思いに添って看取りのケアができるように準備して実施する(e④)、家族の意向や思いに焦点を当て最期のケアを進める(b③)
思いのずれや本当の思いが見えない中で、思いに添ったかかわりを模索する		患者・家族の思いが違うことで、葛藤しながら思いに寄り添う努力をする(b②)、患者・家族の思いと食い違わないよう、約束を守り丁寧に対応する(e④)、患者に合わせて、こちらの見方や方向性を切り替える(f④)、患者の本当の思いがわからず、思いが聴けるように試行錯誤する(d②③)	
患者・家族の意思を尊重する専門職としてのあり方を模索する	患者・家族の意思を尊重する専門職としてのあり方を模索する	本人・家族の思いを尊重する看護専門職としてのアセスメントのあり方を模索する(b②)、希望に添えない時にも、専門職として説明できるよう試行錯誤する(b②③)	
	看護師としての責任や使命感を意識して取り組む	看護師としての責任の重さを自覚する	命にかかわる仕事の責任の重さを受け止める(a①)、見落としのないように、責任の重さを感じながら患者にかかわる(f②)、看護師として応えるために知識・技術を向上する責任を自覚する(c②)
		受け持ち看護師として、受け持つということの意味や責任を意識して行動する	一番の理解者である受け持ち看護師として、ケアを任せられる責任を意識し行動する(b②)、プライマリナースとして自分がやらなければと思ひ、抱え込む(e①~③)、受け持ち看護師として、見通しを持ち最後までケアを引き受ける(a③)、患者にとって大事なことを優先することを自分の責任として実行する(f③)
他者と協働して実践を進めていく	ケアを通して、何とかしたいという課題意識をもつ	治療への患者の辛さを受け止め何とかしたいという思いを強くもつ(d①)、医師に言えない患者の思いを知り、何とかしてあげたいと思う(f③)、実践をもとに、学生時代からの課題意識をさらに継続する(e①~③)	
	看護について心がけていることをもち行動する	患者の思いに添った寄り添うケアを譲れない看護として心がける(b①②)、忙しくても丁寧に対応することを心がける(c②、e③)、看護について心がけていることがあり、ケアに当たる(a①)	
	他者に働きかけ、他者とともに問題解決やケアに取り組む	できることの限界の意識から、先輩や多職種に相談し医師に働きかける(d①)、周囲の人に働きかけ、連携して問題解決に取り組む(a③)、多職種で協力して退院に向けた(b②③)、リーダーとして、後輩への助言に責任を持つよう努力する(c③)、メンバーに働きかけてケアの改善をめざす(f④)	
実践をもとに、今後の看護に向けて自分を進めていく	やるべきことを伝え患者の協力を得る	患者の協力が得られるまで、根気よく援助を続ける(a③)、患者のために伝えるべきことは伝えていく(f④)	
	実践をもとに、今後の看護に向けた思いや自信を見出す	患者の変化を今後の看護への意欲、自信につなげる(d①)、患者が回復する様子から、看護への意欲や楽しさを見出す(a③)、受け持ち看護師として、重症者のケアを自分でできるようになることにやりがいを見出す(a②)、何もできなかったという後悔を、意識して今後の看護につなげる(d②③)	
	看護師としての今後の自分の姿や目標を描く	仕事の継続意欲や先の看護師としての目標を見出す(a②)、身近な先輩をモデルに、今後の自分の姿を描く(c②)、チームリーダーの実施に向け準備する(e④)、今後の自分の看護師としてのあり方や目標について思索する(b③)、自分の目指す看護や看護師像を持ち、ケアを心がける(e①~③、e④)	
自分の成長や実践力を向上する	成長できる機会や方法を捉えて、意図して活用する	研修会や日々の実践を学ぶ機会として活用する(b①)、職場外でのボランティアなど自主的な活動により、家族の理解を深める機会をもつ(e①~③)、わからないことは自分で調べたり、考えてから助言をもらう等自分が学ぶための工夫をする(c②)、学生指導を通してケアについて考え、自分を振り返り学ぶ機会とする(b③)、ターミナルケアができるように研修に行く(b③)、リーダーができるようになるために、色々な場での経験を重ねる必要を自覚する(c③)、先輩やチームに積極的に意見を伝えるように努める(e①~③)	
	経験を重ね、通常やるべき看護業務ができるようになる	術前の看護や看護技術が実施できるように経験を重ねる(b①)、受け持ちでなくてもできる一般的な看護をちゃんとする(d②~③)、退院支援の手続が円滑にできるように取り組む(b②)、処置・技術の経験や向上を意識し実践する(e①~③)	
	自分の経験を活かして、新たな役割や実践に臨む	経験からケアの実行可能性を見通し、対策を考案する(f③)、自分の経験を活かして新人にかかわる(e①~③、e④)、経験を活かして新たな実践に臨む(d②③)	
看護に対する自分の疑問や課題への答えを実践からつかむ	看護に対する自分の疑問や課題への答えを実践からつかむ	看護師が急性期にADL拡大に取り組む重要性をつかむ(a③)、自分の実践から、一番患者を看ている看護師の役割は何かを見出す(f③)、自分の考えとして、家族と一緒に考えた看護を大事にする(e①~③)	

患者の実際を理解する】は<書いてある通りにいかないの、実際を見る②><呼吸状態に優先して取り組み、体の中で何が起きているかを理解する②>などであった。そして、【試行錯誤しながら、自分なりに考えて実践に取り組む】は<初めて受け持ち看護師となり、わからない中で術前の看護に取り組む①><先の見通しがわからず、うまくは応えられなかったができることを考え対応する②>など自分なりにできる方法を考えて看護に取り組むものや、<自分なりの判断基準を決めて試行し、相談しながらケアの判断を固めていく③>など難しいケアの判断や<不安な中で、自分にできる学生指導の方法を考えてかかわる③>など新たな役割への取り組みであった。

【先の予測や見通しを持つよう意識し行動する】では<先を見据えることの大切さに気づき、見通しを意識して行動する①><もっと早く異常に気付けるように、文献を調べる②>や、【根拠のある実践をするために、調べて不明な点を解決する】では<身近な資源を活用し、わからないことはできるだけ早く解決する①②><調べて、間違いないように患者に対応する②>などの取り組みであった。

【実践を振り返り、自分なりの視点で評価する】は<常に、実践の振り返りをする①>や、<自分でできることと相談すべきことの見極めが難しく悩む②><事後評価が得にくい、自分なりの視点で評価する③>であった。【ケアにあたる自分の気持ちを整える】は、仕事へのプレッシャーや看護に苦慮した患者に対し<気持ちを切り替えて、仕事の大変さを乗り越える①><苛立つ気持ちをコントロールし、患者を受け止める④>などの取り組みであった。

2) 対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する

これは患者・家族の思いを理解し、看護専門職としてその思いに添う取り組みで、4つの中項目が含まれた。

【患者の思いを汲みとり、治療・ケアに反映する】は<患者の思いを汲み取り医師に対応を相談する①><医師に言えない患者の思いに気づき、間に入る②><治療への患者の思いをもとに、医師に働きかけ理解を得る③>などで、【家族の思いに添って看取りのケアを実施する】は、主に3年目以降の経験において<家族の思いに添った看取りができるように準備して実施する④><家族の意向や思いに焦点を当て最期のケアを進める③>などの取り組みであった。

一方【思いのずれや本当の思いが見えない中で、思いに添ったかかわりを模索する】では<患者・家族の思いが違う中、折り合うことに葛藤しながら、思いに寄り添う努力をする②><患者・家族の思いと食い違わないよう、約束を守り丁寧に対応する④>など、患者・家族の思いに添うことが難しい現実に取り組むものや、<患者に合わせて、こちらの見方や方向性を切り替える④>など想定と違った患者に対し看護の方向性を切り替える取り組みであった。

【患者・家族の意思を尊重する専門職としてのあり方を模索する】は<本人・家族の思いを尊重する看護専門職としてのアセスメントのあり方を模索する②><希望に添えない時にも、専門職として説明できるように試行錯誤する②③>など専門職として、患者・家族の思いを尊重した判断や説明をする取り組みであった。

3) 看護師としての責任や使命感を意識して取り組む

これは、看護師としての仕事に対する責任や受け持ち看護師として患者を受け持つ責任、課題に対する看護師としての使命感を意識した行動で、4つの中項目が含まれた。

【看護師としての責任の重さを自覚する】は<命にかかわる仕事の責任の重さを受け止める①><見落としのないように、責任の重さを感じながら患者にかかわる②>など命を守る責任の重さや、<看護師として応えるために知識・技術を向上する責任を自覚する②>取り組みであった。また【受け持ち看護師として、受け持つということの意味や責任を意識して行動する】は<一番の理解者である受け持ち看護師として、ケアを任せられる責任を意識し行動する②><プライマリナースとして自分がやらなければならない、抱え込む①③>など受け持ち看護師として率先して患者にかかわったり、<受け持ち看護師として、見通しを持ち最後までケアを引き受ける③><患者にとって大事なことを優先することを自分の責任として実行する③>などの取り組みであった。

また、【ケアを通して、何とかしたいという課題意識をもつ】は、患者・家族の辛さや医師に言えない思いに直面し<治療への患者の辛さを受け止め何とかしたいという思いを強くもつ①><医師に言えない患者の思いを知り、何とかしてあげたいと思う③>などの取り組みであった。

【看護について心がけていることをもち行動する】は<患者の思いに添った寄り添うケアを譲れない看護として心がける①②>など看護への譲れない思いや、<忙しくて

も丁寧に対応することを心がける②③>などの取り組みであった。

4) 他者と協働して実践を進めていく

これは、チームの看護師や多職種、患者・家族などの関係者ととも協力して問題解決や実践に取り組むもので、2つの中項目が含まれた。

【他者に働きかけ、他者ととも問題解決やケアに取り組む】はくできることの限界の意識から、先輩や多職種に相談し、医師に働きかける①><周囲の人に働きかけ、連携して問題解決に取り組む③>など多職種や看護チームのメンバーに働きかけ、一緒に問題解決を目指す取り組みであった。また<多職種連携で協力して退院に向けた②③><リーダーとして、後輩への助言に責任を持つように努力する③>であった。

【やるべきことを伝え患者の協力を得る】ではく患者の協力が得られるまで、根気よく援助を続ける③><患者のために伝えるべきことは伝えていく④>など患者の協力を得られるよう働きかけ、双方で問題解決に取り組むものであった。

5) 実践をもとに、今後の看護に向けて自分を進めていく

これは、患者の状況や問題が改善しケアの成果を実感したことで、看護への興味ややりがい、看護師としての自分のあり方や目標をもち、今後の看護に向けて自分を進めていく取り組みであり2つの中項目が含まれた。

【実践をもとに、今後の看護に向けた思いや自信を見出す】はく患者の変化を今後の看護への意欲、自信につなげる①><患者が回復する様子から、看護への意欲や楽しさを見出す③>など、看護への思いや自信を見出す取り組みであった。また【看護師としての今後の自分の姿や目標を描く】はく仕事の継続意欲や先の看護師としての目標を見出す②><身近な先輩をモデルに、今後の自分の姿を描く②>や、<チームリーダーの実施に向け準備する④>など新たな役割や、<今後の自分の看護師としてのあり方や目標について思案する③>取り組みであった。

6) 自分の成長や実践力を向上する

これは、自分の成長や実践力の向上に向けて経験を重ねたり、学習の機会を捉えて自己学習したり、経験を活かして新たな役割に取り組むもので、4つの中項目が含まれた。

【成長できる機会や方法を捉えて、意図して活用する】はく研修会や日々の実践を学ぶ機会として活用する①>

<職場外でのボランティアなど自主的な活動により、家族の理解を深める機会をもつ①③④><学生指導を通して、ケアについて考え、自分を振り返り学ぶ機会とする③>など研修会のほか、ボランティア活動、学生指導へのかかわりを自分の成長と関連付けた取り組みであった。またくわからないことは自分で調べたり、考えてから助言をもらう等自分が学ぶための工夫をする②><先輩やチームに積極的に意見を伝えるように努める①③>など先輩への考えの伝え方を工夫して学ぶ取り組みであった。

【経験を重ね、通常やるべき看護業務ができるようにする】はく術前の看護や看護技術が実施できるように経験を重ねる①>など日常的な看護業務ができるようにする取り組みであった。【自分の経験を活かして、新たな役割や実践に臨む】は、ケア計画に対し経験をからケアの実行可能性を見通し、対策を考案する③>や、<自分の経験を活かして新人にかかわる①③④>などの取り組みであった。【看護に対する自分の疑問や課題への答えを実践からつかむ】はく看護師が、急性期にADL拡大に取り組む重要性をつかむ③><自分の実践から、一番患者を看ている看護師の役割は何かを見出す③>など、自分の実践上の課題や疑問に対する気づきや答えをつかむ取り組みであった。

3. 看護実践経験から看護について得たこと

大卒新任者が看護について得たことは、表5のように8項目に分類された。文中の《 》は分類項目、“ ”は看護について得たことの要約を示す。

《対象者への深い理解》は、“長期入院の子どもに付き添う家族には、それぞれに違う悩みやストレスがある”“命を守ることは絶対に大事だが、患者が回復していくということがうれしく、力になった”など新たに気づいた対象者への深い理解を示した。

看護師の役割や責任について《患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割》は、“患者の思いはこちらが思うこととは違うので、勝手に思うのではなくちゃんと聴かないといけない”“看護師は、医師の補助ではなく、一番患者を見て、患者の言えないところや異常に気付いて代弁する役割がある”などであった。そして《命を守る看護師の責任の重さ》は“看護師には、一番に異変に気づき、命が危うい人の命を預かる責任がある”や“薬剤の副作用でここまで急に重症化することがわかり、怖さが初めてわかった”など命や安全を守る責任の重さについてであった。さ

表5 看護実践経験をもとに看護について得たこと

分類	看護について得たことの要約の一部抜粋 (* 英小文字は協力者)	対象	経験
対象者への深い理解	長期入院の子どもに付き添う家族には、それぞれに違う悩みやストレスがある	e	5 a
	命を守ることは絶対に大事だが、患者が回復していくということがうれしく、力になった	a	1 c
	腫瘍の患者は、(現状を)受け止めきれない間に治療を始めなければいけない大変さがある	d	4 a
患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割	患者の思いはこちらが思うこととは違うので、勝手に思うのではなくちゃんと聴かないといけない	d	4 b
	看護師は医師の補助ではなく、一番患者を見て患者の言えないところや異常に気付いて代弁する役割がある	f	6 c
命を守る看護師の責任の重さ	希望に添えない場合にも、看護専門職として説明する責任がある	b	2 c
	看護師には、一番に異変に気づき、命が危うい人の命を預かる責任がある	a	1 c
	薬剤の副作用でここまで急に重症化することがわかり、怖さが初めてわかった	c	3 a
患者の問題解決に対する受け持ち看護師の責任	術後は、1つ見落とすと悪い方向に進んでしまうので見落とさないようにする看護師の責任は重大である	f	6 a
	通して経過を看ているから、問題は何か分かるし、受け持ち看護師には、他の看護師とは違う思いがある	a	1 c
	患者に対しいい顔をせず、伝えることは伝えていかないと、患者にとってもよくない前に進んでいかないと	f	6 e
チームで実践に取り組む意味	重要な決定は、受け持ち看護師が実施し、その計画に沿ってチームも動くので責任がある	c	3 d
	1人で看護しているわけではなく、いろんな人の力を借りないといけないことがある	e	5 b
	看護としてやることは限られていると思ったが、受け持ち看護師から他職種や看護師と連携することで実践が変わっていく	a	1 c
確実に看護を実施するための準備方法	チーム医療では、医師の協力と、みんなの思いが同じでないとうまくいかない	d	4 a
	相手の納得を得るには、自分の経験だけでも言うのではなく、文献のエビデンスや根拠があるとよくいく	e	5 e
	先を見据えることの大切さと意図的な情報収集の技術が必要だとわかった	b	2 a
自分の成長のための目標や機会・方法	人に聞くことは恥ずかしいことではなく、聞いて確実に自信を持って仕事ができることが大事	c	3 c
	自分の目標となる先輩看護師の姿は、段階的にたくさんある	a	1 b
	教えられた知識より自分でアセスメントやエビデンスを考えてケアをしないと応用が利かない	d	4 c
看護に対する“できる”という手応え	ブリエプターとして、新人と一緒に、技術や知識を復習し、自分も成長できたという実感を得た	e	5 e
	看護師のかかわり方で、患者は変わるし、自分のかかわりで患者を変えていける	d	4 a
	ADLの拡大は、医師ではできないし、急性期に看護師がどれだけやるかで決まるので早期介入が大事	a	1 c
	先が見えるようになり、退院支援について、自分がやるべきことや報告・相談すべきことがわかるようになった	b	2 d

らに《患者の問題解決に対する受け持ち看護師の責任》は“通して経過を看ているから、問題は何か分かるし、受け持ち看護師には他の看護師とは違う思いがある”“患者に対しいい顔をせず、伝えることは伝えていかないと患者にとってもよくない前に進んでいかないと”など受け持ち看護師として、患者を受け持つ責任を理解していた。

《チームで実践に取り組む意味》は、“1人で看護しているわけではなく、いろんな人の力を借りないといけないことがある”“看護としてやることは限られていると思ったが、受け持ち看護師から他職種や看護師と連携することで実践が変わっていく”などチームで患者にかかわる意味を示した。

《確実に看護を実施するための準備方法》は、“相手の納得を得るには、自分の経験だけでも言うのではなく、文献のエビデンスや根拠があるとよくいく”“先を見据えることの大切さと意図的な情報収集の技術が必要だとわかった”など見通しを持ち、根拠を明確にして看護を実施するための準備の仕方を示した。そして《自分の成長のための目標や機会・方法》は、“自分の目標となる先輩看護師の姿は、段階的にたくさんある”“教えられた知識より自分でアセスメントやエビデンスを考えてケアをしないと応用が利かない”であった。さらに《看護に対する“でき

る”という手応え》は“看護師のかかわり方で患者は変わるし、自分のかかわりで患者を変えていける”“ADLの拡大は医師ではできないし、急性期に看護師がどれだけやるかで決まるので早期介入が大事”など看護でできることに確信を得ていた。

V. 考察

1. 看護実践経験において取り組んだこと、看護について得たことの学びとしての意味

6名の大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びとして、6つの取り組みと8つの看護について得たことが示された。看護について得たことは、各自が異なる経験をもとに見出した知識や態度であるが、いくつかの共通点を見出すことができた。また、長期的に新任期の看護実践経験を捉えたことで、受け持ち看護師として患者個人にかかわった経験、新人教育やリーダーなど新たな役割を担う経験における取り組みや看護について得たことが語られ、看護実践経験をもとにした学びとして、1年未満の経験を捉えた先行研究には見られなかった内容も明らかになった。以下の文中の〔 〕は看護実践経験において取り組んだことの大項目を示す。

〔実践における確かさが持ちにくい中で自立を目指す〕

取り組みにおいて、先輩の支援を得て実践に対処することは、複数の先行研究（谷脇，2006；中野，2004；坂村，2009）と一致する結果であった。一方で、大卒新任者は常に先輩看護師の支援を求めるのではなく、看護実践において自立する道を探っていたことは注目すべき点であった。1年未満の看護師については、タイムリーに先輩の助言を求めることができず、わからないまま自分で対応している（西田，2006）との報告もあるが、本研究では、闇雲に自分で対応するのではなく根拠や見通しを持つことを意識し、試行錯誤しながら看護師として自立するよう取り組み姿があった。この点は、本研究が1～4年目までの経験を捉えたことや、学習意欲の高い人を対象としたことが影響していることが考えられる。また、看護師として自立するためには適切に自己評価できることが重要であると考えられるが、自己の力量の客観的評価は新人看護師にとって難しいことの一つである（森ら，2004）と指摘されている。本研究ではく自分でできると相談すべきことの見極めが難しく悩む②>など先輩の目が離れる2年目や新たな役割を担う3年目の経験においての、自己評価の難しさも示され、新任期を通して自分の力量が判断しにくい中で自立を模索していることへの適切な支援の必要性が示唆された。

〔看護師としての責任や使命感を意識して取り組む〕では命や安全を守る責任のほか、患者を受け持つ責任を意識した取り組みが学びとなっていたことは、1年未満の経験を扱った先行研究には見られなかった点であった。患者の一番近くにいる存在であり、患者にとって一番の理解者である受け持ち看護師として、率先して患者・家族にかかわったことが、患者を受け持つことの意味や責任を意識した取り組みにつながっていた。看護について得たことでも《患者の問題解決に対する受け持ち看護師の責任》では、他の看護師とは違う受け持ち看護師としての思いや意思決定への責任の自覚が示されていることから、患者との1対1の関係性の中で、責任を果たす努力をすることが専門職としての学びとなる取り組みであったと考える。一方で、患者への責任を抱え込む状況がみられたことは、大卒新任者が周囲に支援を求められない傾向を示した先行研究（西田，2006；酒井ら，2003）に共通する結果であった。

〔対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する〕取り組みは、利用者中心の看護の理念を反映した取り組み

であった。また、看護について得たことで《患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割》では、患者の思いは看護師の思いとは異なることや、患者の言えないことや異常を代弁する看護の役割、人としての権利を尊重することへの理解が示されており、患者・家族の思いにかかわることそのものが重要な学びの機会であったと考える。

根本（2002）は、看護に対する理想や思いを持つ大卒者は、実践の中で折り合いをつけることができないことがあると報告している。本研究でも、患者の思いに添うことが難しい場合に、現実的に考えて折り合うことに対し葛藤を抱えていたが、患者・家族の思いのずれを受け止めたり、患者に合わせて見方を切り替えるなど工夫して取り組んでいた。梶田（1992）は、自己教育の視点として、思うようにいかない場合にも、粘り強く自己に働きかける自己統制力の大切さを述べている。ここでの取り組みは、まさにこの自己統制力が発揮されたことで看護師としての成長につながる取り組みとなったと考えられる。

チームでの実践を示す〔他者と協働して実践を進めていく〕取り組みは、看護だけで取り組むことの限界感を越えて実践を進めるものであった。また《チームで実践に取り組む意味》として、受け持ち看護師から他職種に働きかけ連携することで実践が変わっていくことを実感していた。稲垣、波多野（1998）は、人が有能な学び手であるために視点の異なる他者の存在が必要であると述べている。受け持ち看護師として多職種に意見を伝え、連携して問題解決に取り組むことは、看護に対する考えを他職種に説明する機会となり、看護師の存在意義をつかむ重要な取り組みであったと考える。先行研究では、他職種との連携について、就職後12か月の段階では他職種の活用は難しい（高島ら，2004）との報告があるが、本研究では1年目の早期の段階で他職種や医師に働きかける取り組みも見られた。これは、近年政策として進められてきた多職種連携の活動が定着し、新任者もチームの一員として行動するよう求められていることや、受け持ち看護師が他職種に自由に相談できる環境があることなど、医療現場自体が変化してきた結果ではないかと考える。

さらに〔自分の成長や実践力を向上する〕〔実践をもとに、今後の看護に向けて自分を進めていく〕取り組みにあるように、看護のおもしろさややりがいを見出すことが、よりよい看護実践に向けて自己を動機付け、仕事の責任の重さ

を担う態度を育むことにつながるのではないかと考える。

2. 看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職育成のための学士課程教育の重要性

看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職となるために、学士課程において何を学ぶとよいのかについて、以下に考察する。

1つ目に、対象者の思いに焦点を合わせ、その人を人として理解し尊重するための基礎的態度を学ぶことであると考える。

6名の大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びには「対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する」取り組みや、「対象者への深い理解」「患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割」などが看護について得たこととして示された。これらは学士課程において、その人らしさを尊重する看護の重要性について学び、卒業後の実践において、「対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する」にあるように、対象者の思いに添うことを意図して取り組んだことで、実践を通して人として相手を尊重することへの学びを深めることにつながったのではないかと考える。このように、利用者中心の看護の理念を反映し、よりよい看護実践の方向性を指し示すものとなるという点で、看護専門職として自己を育成するための基盤となる取り組みであったと考える。

2つ目に、「看護師としての責任や使命感を意識して取り組む」で、受け持ち看護師であることの意味や責任を意識して行動することが、看護実践経験をもとにした学びにつながっていたことから、学士課程では、看護専門職としての責任や、看護専門職として自分を育てていくことの意味と方法について考えることが重要であると考えられる。看護師としての役割や責任を果たすことは、看護について学び続けることへの重要な動機となると考えられる。自己の育成という点で「自分の成長や実践力を向上する」では、身近な資源の活用に留まらず、職場外での活動や新たな仕事の機会、新人とのかかわり、意図的に経験を重ねるなど多様な機会を捉えて取り組んでいた。松谷(2012)は、1年目看護師が必要と認識した臨床看護実践能力の研究において、自己研鑽力が大切であると気付くに至っていたことから、これこそが看護学士力であろうと述べている。本研究においても、大卒新任者が様々な機会において方法を工夫し、自己の成長を考えていたことは学士課程で学んだ学び

方が基礎になっているのではないかと考えられる。一方で、大学での学びをうまく活かせず悩む姿や命を預かる責任の重さに緊張を強いられる様子もみられた。看護に対する実践力が伴わない中で、役割や責任を果たそうとすることは無力感を強めることも考えられることから、学士課程では、看護の責任の重さだけでなく、看護のおもしろさやこんな看護をしていきたいという思いを育てていくことが必要であると考えられる。

3つ目には、他者と一緒に考え問題を解決する意義と方法を学ぶことである。他者とともに問題解決に取り組むことは、自分だけではできないことや看護だけで取り組むことの限界を超える取り組みであったことから、自分自身や看護実践をさらに発展させていくために不可欠なことであると考えられる。他者と一緒に考え問題を解決していくことの最初の1歩は、わからない時は先輩の支援を得ることであり、聞けば応えてくれると分かったことではないかと考える。それをきっかけに「他者と協働して実践を進めていく」取り組みにあるような、多職種に対し問題解決に向けて働きかける態度に繋がっていくのではないかと考える。多職種と連携しチームの一員となるための看護実践能力は、実習では習得が難しく、職場に出てから身に付けていくべき能力であるとも言われている(中山, 2010; 小松, 2009)。しかし、例えばグループワークにおいて、自分の果たした役割だけでなく、他のメンバーが果たした役割についても考えることが、他者と協働し、他者と共に学び成長するための能力向上への一助となると考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、看護実践経験をもとにした学びをより明確にするために、学習意欲があり管理者の推薦を得た人を研究協力者とした。そのため、学習能力の高い人を対象として得られた結果であると考えられ、対象の偏りがあるという点で限界がある。また、6名の大卒新任者の質的分析による結果であることから、大卒新任者全体の傾向を示すためには、さらに研究を重ねる必要があり今後の課題である。

VII. 結論

1. 6名の大卒新任者の看護実践経験をもとにした学びは
[実践における確かさが持ちにくい中で自立を目指す]
[対象者の思いに焦点を合わせたかかわりを模索する]

〔看護師としての責任や使命感を意識して取り組む〕〔他者と協働して実践を進めていく〕〔実践をもとに、今後の看護に向けて自分を進めていく〕〔自分の成長や実践力を向上する〕取り組みにより、「対象者への深い理解」《患者・家族の思いに直接かかわる看護の役割》《命を守る看護師の責任の重さ》《患者の問題解決に対する受け持ち看護師の責任》《チームで実践に取り組むこと》《確実に看護を実施するための準備方法》《自分の成長のための目標や機会・方法》《看護に対する“できる”という手応え》を得たことであった。

2. 看護実践経験をもとに学び続ける看護専門職となるために、学士課程では対象者を人として尊重するための基礎的な態度、看護専門職として自分を育てていく責任と方法、他者と一緒に考え問題解決していく意義や方法を学ぶことが重要である。

謝辞

本研究に多大なご協力を頂きました看護職者の皆さま、また、御指導頂きました諸先生方に、深く感謝申し上げます。尚、本稿は平成26年度に岐阜県立看護大学大学院看護学研究科に博士論文として提出したものの一部を加筆・修正したものである。また本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 荒川千秋，細川淳，小山内由希子ほか。(2007). 大卒新人看護師の支援のあり方に関する研究. 日本看護管理学会誌, 10, 37-43.
- 井部俊子。(2002). 【学卒看護師の課題】看護系大学新卒者の臨床実践能力. 病院, 61(4), 288-295.
- 梶田叡一。(1992). 自己教育への教育(第11版). (pp. 43-44). 明治図書.
- 小松光代，眞鍋えみ子，三橋美和ほか。(2010). 看護学士課程卒業時と卒業後1年における看護実践能力の経験到達状況の比較. 京都府立医科大学看護学科紀要, 19, 35-42.
- 稲垣佳代子，波多野諠余夫。(1989). 人はいかに学ぶか(第17版)(pp. 130-131). 中央公論社.
- 松谷美和子，佐居由美，奥裕美。(2012). 看護系大学新卒看護師が必要と認識している臨床看護実践能力—1年目看護師への面接調査の分析—. 聖路加看護学会誌, 16(1), 9-19.

- 三橋美和，小松光代，眞鍋えみ子ほか。(2010). 卒業後の看護実践能力の到達状況—学士課程卒業生への横断調査から—. 京都府立医科大学看護学科紀要, 19, 43-52.
- 宮脇美保子。(2005). 大卒看護師1年目の体験—新人看護師の1年目の立場から—. 日本看護学教育学会誌, 15(1), 15-24.
- 文部科学省。(2012). 「看護系大学におけるモデルコアカリキュラム導入に関する調査研究報告書」. 2014-10-12. http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1307331.html
- 森真由美，亀岡智美，定廣和香子ほか。(2004). 新人看護師行動の概念化. 看護教育学研究, 13(1), 51-64.
- 中野康子，張替直美，小林敏生。(2004). 新卒看護師の臨床実践能力向上に影響する要因と取り組みに関する縦断的研究. 山口県立大学看護学部紀要, 8, 99-108.
- 中山洋子，石井邦子，石原昌ほか。(2010). 看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究—臨床経験1年目から5年目までの看護系大学卒業看護師の実践能力に関する横断的調査—. 平成18年度～21年度 文部省科学研究報告書. 科学研究費補助金(基盤A) 成果報告書, (pp1-61).
- 根本敬子，佐藤まゆみ，大室律子ほか。(2006). 新人看護職者の看護実践能力を育成する教育プログラム開発—大卒新人看護職者が就職6ヵ月後に抱く新人教育への希望・要望—. 看護管理, 16(9), 776-780.
- 酒井郁子，湯浅美千代，佐藤まゆみほか。(2003). 看護系大卒者の特徴と育成・活用に関する看護師長の認識. 看護管理, 13(7), 517-522.
- 坂村八恵，岡本裕子，坪井敬子ほか。(2008). 新卒看護師の専門職者としての自立体験—8名の大卒看護師へのインタビューを通して—. 広島国際大学看護学ジャーナル, 6(1), 47-56.
- 高島尚美，樋之津淳子，小池秀子ほか。(2004). 新人看護師12ヵ月迄の看護実践能力と社会的スキルの修得過程—新人看護師の自己評価による—. 日本看護学教育学会誌, 13(3), 1-17.
- 豊島由樹子，萩弓枝，伊藤ふみ子ほか。(2008). 新人看護師が体験した点滴静脈注射技術の困難と習得に向けての学び. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 17, 61-68.

(受稿日 平成29年8月28日)

(採用日 平成30年1月29日)

The Learning Status of Newly Employed Nursing Graduates Based on Their Clinical Nursing Experience

Mayuri Hashimoto

Management in Nursing, Gifu College of Nursing

Abstract

The purpose of this study was to examine how newly employed nursing graduates learned from their clinical nursing experiences by focusing on "How they practiced nursing thinking?" and "What they learned about clinical nursing?" "This study also considered what is taught in a bachelor course to become a professional nurse, who can continue to learn during clinical nursing experiences".

Qualitative analyses were performed on data collected from semi-structured interviews that were conducted twice with six newly employed nurses who had worked 2 to 3 years as nurses after graduation.

In two interviews, the participants narrated about three to six stories of their clinical nursing experiences with their patients and their new responsible roles.

The learning based on clinical nursing experiences was categorized into the following six initiatives: "attempting to be independent even if they are not sure about the practice"; "exploring their involvement while focusing on the patient's feelings"; "being aware of their sense of responsibility and mission as a nurse"; "working in cooperation with other care workers"; "using work results to motivate themselves to improve"; and "endeavoring to grow and improve their own practical abilities."

They also learned the following about nursing: "a deep understanding of the subject"; "a nurse's role in directly being involved with the feelings of patients and their families"; "a nurse's heavy responsibility to protect life"; "a primary nurse's responsibility to solve patients' problems"; "working as a team"; "how to prepare for proper nursing practice"; "how to set goals and seek opportunities and methods for their own growth"; "a feeling that nursing is possible"; and "feeling competent enough to become a nurse".

In order to become a nursing professional who continues to learn based on clinical nursing experiences, undergraduate courses should include information that allows students to learn how to focus on the will of an individual, understand and respect that patient as an individual, accept the responsibility to nurture as a professional nurse, and understand the significance of working with others to solve problems.

Key words: undergraduate courses, newly employed nurses, clinical nursing experience, learning